

佐賀新聞 2009(平成21)年12月24日(木) ひろば欄 私の主張

15 ひろば 2009年(平成21年)12月24

江戸時代の日本の対外関係は一般に「鎖国」体制と言われるが、実は海外につながる「四つの口」があった。長崎における中国人・オランダ人との通商関係(長崎口)、対馬藩を介した朝鮮国との通交関係(対馬口)、薩摩藩を通じた琉球王国(日中西属)との宗属関係(薩摩・琉球口)、松前藩を通じたアイヌ民族との関係(松前口)の四つの窓口だ。

日本は、「西洋」を垣間見るわずかな窓口である長崎口を除いて、中国との微妙な関係を伴いながらも、東アジア社会(東洋)の中で安定していた。

この「四つの口」体制は、18世紀末以来のロシアの南下や19世紀前半の欧米列強の東アジア侵出により、崩壊していく。日本は、1853年のペリー浦賀来航・プチャーチン長崎来航を経て、54年に

私の主張

浦川 和也(44) 佐賀市

「近代との遭遇」を考える

日米和親条約、55年に日露和親条約を締結し、さらに58年に日米修好通商条約をはじめとする安政5カ国条約(米・蘭・露・英・仏)を締結して、ついに開国することになった。

このような近世日本の「四つの口」体制の崩壊は、「東洋」という枠の中にいた日本・日本人が、その枠が壊れ、薄れていく中で、産業革命を果たして圧倒的な力をもって植民地拡大を図って侵襲してきた「西洋」と直接的に「遭遇」することを意味していた。

すなわち、「近代」とは「西洋」であり、「近代との遭遇」とは、全く違った西洋文化との衝撃的な出会いである。これは私のとらえ方だ。

元日から、佐賀城本丸歴史館開館5周年記念特別展「近代との遭遇―世界を見る・日本を創る―」を県立美術館で開催する。

担当の本丸歴史館の松田学芸員と美術館の野中学芸員を中心に、準備は今まさに追い込みにかかっている。両学芸員も、図録や展示解説文を執筆していく中で、それぞれ、「近代」とは何だったのかを演奏していた。いずれも会場は美術館ホール。

「近代」とは「西洋」であり、「近代との遭遇」とは、全く違った西洋文化との衝撃的な出会いである。これは私のとらえ方だ。

1月17日には木下直之東京大学教授の「日本美術の登場・江戸美術の退場」、2月7日には高辻知義東京大学名誉教授の「久米邦武の見なかつた町と国・マイセン、ザクセン」の講演会もある。1月23日の「あらかしコンサート」では、九州各地で活躍中のバイオリン、ピオラ、ピアノのクラッシックユニット「楓雅」に、岩倉使節団がボストンの音楽祭で聴いた曲を演奏していた。いずれも会場は美術館ホール。

「近代」とは「西洋」であり、「近代との遭遇」とは、全く違った西洋文化との衝撃的な出会いである。これは私のとらえ方だ。

1月17日には木下直之東京大学教授の「日本美術の登場・江戸美術の退場」、2月7日には高辻知義東京大学名誉教授の「久米邦武の見なかつた町と国・マイセン、ザクセン」の講演会もある。1月23日の「あらかしコンサート」では、九州各地で活躍中のバイオリン、ピオラ、ピアノのクラッシックユニット「楓雅」に、岩倉使節団がボストンの音楽祭で聴いた曲を演奏していた。いずれも会場は美術館ホール。

「近代」とは「西洋」であり、「近代との遭遇」とは、全く違った西洋文化との衝撃的な出会いである。これは私のとらえ方だ。

1月17日には木下直之東京大学教授の「日本美術の登場・江戸美術の退場」、2月7日には高辻知義東京大学名誉教授の「久米邦武の見なかつた町と国・マイセン、ザクセン」の講演会もある。1月23日の「あらかしコンサート」では、九州各地で活躍中のバイオリン、ピオラ、ピアノのクラッシックユニット「楓雅」に、岩倉使節団がボストンの音楽祭で聴いた曲を演奏していた。いずれも会場は美術館ホール。